リコー三愛グループ会誌

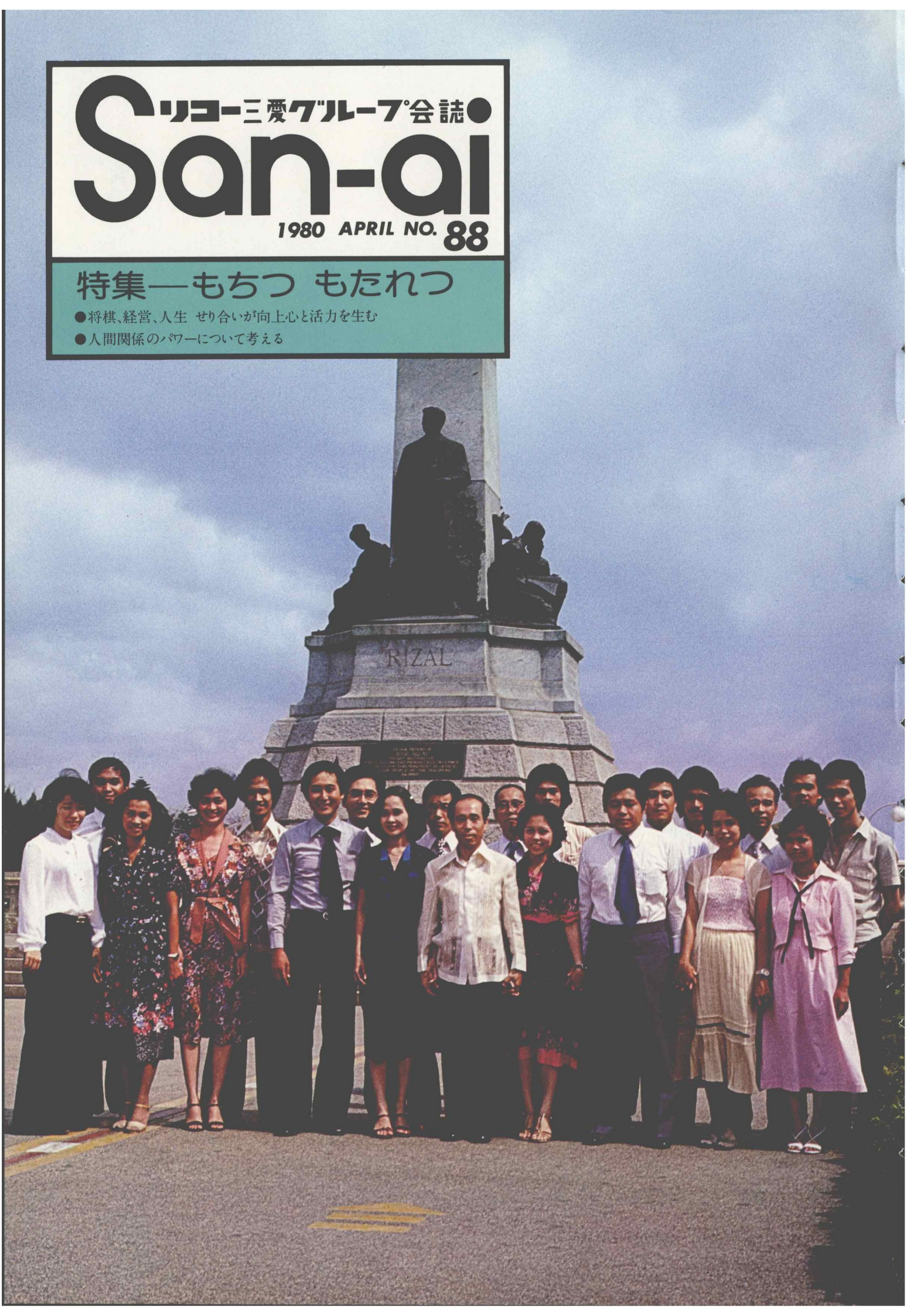
San-ai

1980 APRIL NO. 88

特集—もちつ もたれつ

●将棋、経営、人生 せり合いが向上心と活力を生む

●人間関係のパワーについて考える



さらに広がった〝愛の手〟
遺児たちに年末プレゼント贈る



■過去最高の千百五十三万余円が

不幸にして亡くなられたリコー三愛グループ各社社員の遺児のすこやかな成長を祈って五年前から続けられてきた〝愛の手運動〟。

昨年末行なわれた募金は、グループ各社の実行委員総勢七九〇余人が中心となった活動により、前年を約三割上回る一一、五三八、二八五円（五三年度九、五八一、六五四円）が集まりました。

この浄財は昨年末、各社愛の手委員会を通じて、八四名の遺児の皆さんと生活にお困りの二家族計八六名に一人一〇万円ずつ年末プレゼントとして贈られました。

また、今年、新入学する遺児、二名の皆さんには、お祝いとしてランドセル等の学用品をお贈りしました。

三愛会事務局には、お母さん、お子さん方からのお礼のお便りがたくさん届いています。

心のこもったご協力をいただいた皆さんに厚くお礼を申しあげます。

■市村初代会長の思いやりが端緒

「わたくしたちの心をつなぐ愛の手」の合いことばのもとに展開されたこの運動は、市村清初代会長の、物故社員遺族へのあたたかい配慮からスタートし、リコー三愛グループの〝人を愛する〟心にささえられて年ごとに広まってきたものです。

昭和三十六年一月、当時、三愛石油庶務課長だった佃正人さんが病死されました。

その葬儀に参列された会長は、まだ中学三年生だった長女・正子さん、小学四年生の長男・昭夫くんのいたいけな姿に胸を痛め、社業発展のために尽くした故人の遺児たちに、なんとか励ましの手をさしのべようではないかと提案されました。

これを受けた三愛会理事会の審議によって設立された市村遺児育英会が、愛の手運動のいしずえとなったのです。

当初の育英会は、市村会長のポケットマネーを基金として運営されていましたが、この意義ある制度に本当に血を通わせるためにはグループ社員一人ひとりの自発的な参加こそがたいせつとの声が高まって、五十年末「この子たちに愛の手を」のよびかけで、第一回の愛の手募金が行なわれました。

三十四社、五団体の各職場では、若手社員が中心になっての実行委員が手づくりの募金箱を作ってよびかけたところ、どこでも予想を上回る反響があって、当初目標の二〇〇万円の二倍以上、四、五七三、〇二七円が集まりました。

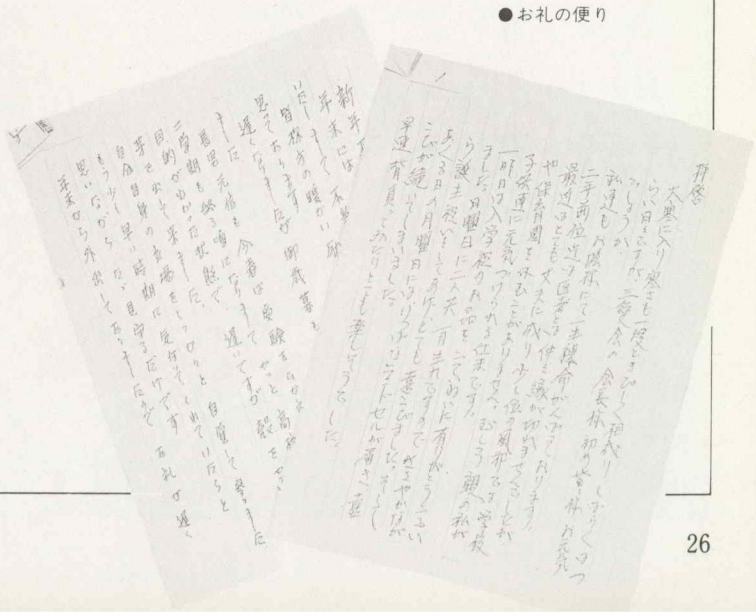
同年末の十二月二十五日、富士山麓山中湖畔のリコー山中荘で、当時四十五人の遺児の皆さんに、一人五万円の歳末プレゼント贈呈式が行なわれ、その夜は賑やかに〝母と子のクリスマスパーティー〟が催されたのでした。

翌五十一年五月、三愛会の主要事業の一つであるボランティア活動の組織として「愛の手委員会」が正式に発足しました。

この委員会は、会長（三愛会会長）、事務局長（三愛会事務局長）、委員（会員各社の総務または人事担当課長）を中心に運営され、実際のボランティア活動については各社の社員および家族からなる実行委員（任期一年）によって進められることになりました。実行委員の数は年をおって増加しつづけています。



●お礼の便り



■職場の実行委員の奮闘で成功

リコー三愛グループの美しい年中行事となった愛の手歳末募金は、年をおってさかんとなり、五十二年末には、六十九人の遺児に一人八万円を贈ることができました。そしてグループ会員会社が、それまでの三十四社から一挙に百一社にふえた五十三年には、運動が職場のすみずみにまで浸透した結果、募金総額は九五八万余円に達し、七十七人の遺児に一人一〇万円のプレゼントが贈られました。

そして今年度はそれをさらに大きく上回り一一、五三八、二八五円と、一千万円の大台を突破する成果を収めたのです。

「多額の浄財が集まったことは、もちろんありがたい限りですが、それにもまして感激しているのは、実行委員の皆さんを中心に、これまでになく多くの各社社



員が自発的に大活躍してくださったことです」と、事務局では語っています。

各職場から申し出て、三善会長から正式に委嘱を受けた各社実行委員は、これまでで最高の七九〇余名にのぼりました。その主力は善意と行動力にあふれた若手社員、特に新しく三愛会会員会社となった職場の皆さんの活躍がめだちました。

また、職場内募金だけでなく、家族の皆さんの協力も得たチャリティー・オークションも例年より一層さかんに行なわれました。

会員各社が集中している銀座地区では、十二月十八日、リコー三愛ビルで、昼休みにバザール、午後六時から八時までオークションが催されました。参加十五社（リコー、三愛石油、三愛不動産、リコー時計販売、東京リコー販売、リコー電子機器販売、リコー精器、リコーエレクトロニクスサービス、日本ビジネスサプライ、リコーゼネラルサービス、リコー三愛グループ健康保険組合、リコー厚生年金基金、新技術開発財団、リコークレジット、三愛会）。社員が家庭から出品された約百七十三点の〝商品〟には、どしどし呼び値がついて、計八万六千百四十円の売上げとなりました。

愛の手運動に示される〝人を愛する心〟はグループ各社での、それぞれ特色あるボランティア活動にも発揮されています。

特に三愛石油羽田支社では、四十八年以来、支社内でのチャリティー・バザー、募金などで資金を作っては、心身障害者、孤児など恵まれない人たちの施設を慰問する活動を続けてきました。身近な仲間の家族への思いやりの心から、さらに世の中を明るくするための行動へと、愛の手は、大きく広がっていくことでしょう。

1月31日現在の54年度収支決算

前年度繰越額	5,578,856
54年度募金額	11,538,285
〃 預金利息他	144,675
〃 収入合計額	11,682,960
54年度年末プレゼント	8,600,000
54年度遺児入学児プレゼント他	46,400
54年度支出合計額	8,646,400
本年度差引残額	8,615,416

（円）

『三愛新書』教養講演集
第二期この春スタート

すでに40万部を売りつくしている『三愛新書』〝人間と文化〟シリーズは、本年2月刊行の二十集で、第一期出版計画をすべて完了しました。各集とも幅広い読者に愛書されて、増刷をかさね、たとえば一集は8刷、二集は7刷、三集四集は4刷といった状況です。取次店をとおさず、東京駅前の八重洲ブックセンターと三愛会だけで毎月一万冊以上の売上げを示しているのですから、出版界でも異色扱いされるわけです。

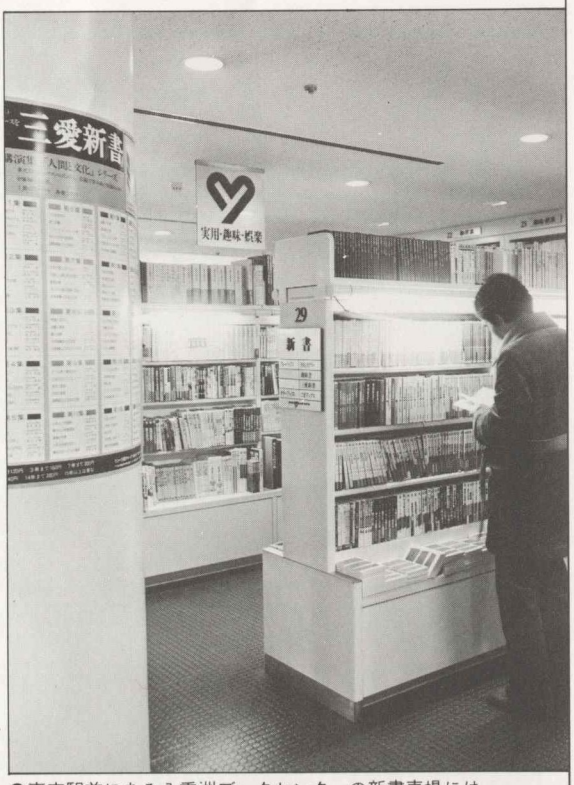
二十集刊行を機会に、既刊分の大型カラーポスターを作り、全国の公立図書館と学校図書館にも配布、グループ各社同様にPR中です。

第二期の出版計画は、教養講演集の二十一集からです。第一期同様、一冊に5テーマを収載、頒価も250円据置き（社員売り8掛）で、4月下旬にスタートする予定です。

歴史あり、科学、宗教、時事問題ありで、企業出版のマスターピースをめざしています。

なお、今後とも初版は一万5千冊ですが、売切れのつど増刷し、たえず品揃えしておりますので、通勤の読書用や贈答品としても広くご利用ください。

なお、『三愛新書』のオレンジ表紙でおなじみの『茨と虹と』（二冊セット、箱入り）も増刷しました。リコー三愛グループの創業者、〝市村清の生涯〟ですから、これもぜひ併読してください。



●東京駅前にある八重洲ブックセンターの新書売場には、常時『三愛新書』が平積みされていて、ベストセラーになっています。